

郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絶句』

竹村, 則行
九州大学文学部 : 助教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9692>

出版情報 : 中国文学論集. 21, pp.60-67, 1992-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絕句』

竹村 則行

絶句詩体で以て古今の詩人を論評し、自己の文学主張を述べる所謂論詩絶句は、唐・杜甫の「戯為六絶句」に濫觴するとされる。その後の顯著な詩例としては、宋・戴復古「論詩十絶」、金・元好問「論詩三十首」、明・方孝孺「論詩」、清・錢謙益「戲作絶句十六首」、王士禛「戲效元遺山論詩絶句」、田雯「論詩絶句」、沈德潛「戯為絶句」、袁枚「傲元遺山論詩」、趙翼「論詩」、洪亮吉「論詩截句二十首」、張問陶「論詩十二絶句」、姚鼐「論詩絶句六十首」、陳衍「論詩絶句三十首」、邱逢甲「論詩」、李希聖「論詩絶句四十首」などがあげられる（清末まで）。錢氏前言によれば、論詩絶句の作者は七、八百家を下らず、単に「論詩絶句」と題した詩例だけでも百餘家の多きを数えるという。また清・謝啓昆のそれは一人で合計五八〇首、陳融「誦嶺南人詩絶句」に至っては四千首を超える驚くべき夥しさである。内容の検討はさておき、単に量の多さからしても、論詩絶句は確かに文学批評史の一章を構成するに足るのであらう。

今回出版された郭紹虞・錢仲聯・王遽常編になる『万首論詩絶句』に収録する清末までの論詩絶句の総数は九四〇九首、これには抄録を含む事を考えれば、その全体数は文字通り一万首に垂んとする。これに民国以後現代までの詩例を加えれば、その数は更に増大する。錢氏の一九八三年の前言によれば、この『万首論詩絶句』は、錢仲聯氏と王遽常氏とが五十年も前に論詩絶句を輯録して旧稿を久しくそのまま篋底に蔵していたのを、これも数十年來

郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絶句』（竹村）

論詩絶句の輯集に携わつて来た郭紹虞氏の知る所となつて所蔵資料を寄せられ、合併整理して出版するに至つたものである。唐宋部には、更に林東海、宋紅両氏の補充になる一七〇余首が加わる。中国古代文学理論研究の第一人者たる郭紹虞氏には、既に論詩絶句研究の確かな業績として『杜甫戲為六絶句集解・元好問論詩三十首小箋』（人民文学出版社、一九七八年）がある。その後記によれば、旧稿では更に王士禛の論詩絶句集解も併せて『杜元王論詩絶句集解』を構想していたという。また、錢仲聯氏は言うまでもなく清詩研究の第一人者であり、同氏主編『清詩紀事』二十二冊（江蘇古籍出版社、一九八七—八九年）は清代詩人五千餘人の伝記・批評・詩話・詩鈔を網羅した膨大な清詩研究の基礎資料集である。後述する如く、論詩絶句が清代に著しく流行した事実を考えれば、『万首論詩絶句』は余人を以て代え難い最良の編纂者を得たと見えよう。実に、清朝論詩絶句の豊富で詳細な輯集は本書の大特色であり、本書の価値を一層高からしめるものである。論詩絶句がここに今後の研究の拠り所となる決定版を得た事の意義は大きいものがある。

二

論詩絶句のほぼ全体を網羅する『万首論詩絶句』全四冊を見れば、論詩絶句の特徴が一目瞭然である。即ちそれは、しばしば数（十、百、千）首の連作に及び、そして宋代に一つの隆盛期を迎え、量的には清代が圧倒的に多いこと。では、なぜ論詩絶句に連作詩が多いのか。それは、絶句という詩型と論詩という手法とが必然的にもたらしめたものである。即ち、五絶又は七絶という短詩型を用いて歴代の詩人や詩風を論評し、あわせて自分の文学理念をも主張する論詩絶句の手法からすれば、五古や七古の長篇の「論詩」などと違い、当然連作絶句の形で総体的に論評するのが最も適当な方法であった。杜甫の「戲為六絶句」や元好問の「論詩三十首」などはその典型である。そして、これらの型式や手法にあわせて、論詩絶句の持つ「戲」態も、その連作詩の流行をもたらした質的要因の一つであったと筆者は考える。濫觴たる杜甫の「戲為六絶句」が既にそうであった様に、論詩絶句は常に戲態を屬性として持つ。これは、真正面からの文学批評である事を避け、あくまでも一種の「戲れ」であるというポーズを示

したものである。しかし、逆にそうであるが故に、歴代の詩人が論詩絶句詩において自分の思いを歯に衣きせず、辛辣に吐露し得たのもまた事実である。こうして、一種の餘興として従来冷やかな評価に甘んじて来た論詩絶句は、実は質的にも確かに文学批評の一翼を荷なっていると筆者は思うのである。

次に、論詩絶句が清朝に大流行した証拠として、本書によって各時代ごとの論詩絶句詩の作者数を次に掲げる。

唐五代

五七名

宋

七六名

金元

二二名

明

二〇名

清及近代（清末まで）

五九七名

この結果、『万首論詩絶句』全四冊中、清及近代の部は三冊半の圧倒的多数を占めることになり、『万首論詩絶句』は実に『清朝論詩絶句』の趣を呈するに至っている。清朝の論詩絶句作者がこの様に桁違いに多いのは、清朝が長く続いて現代に近い事や、清朝部の調査が実に綿密である事等を考えあわせても、やはり清朝に於て論詩絶句が大流行した事実の忠実な反映であるだろう。

では、何故に論詩絶句が清朝に於てこの様に流行したのか。この問題に明確に答える事は、清朝文学の理解に乏しい筆者の能力を越えるが、一つの可能性を考えれば、恐らくそれは、論詩絶句が杜甫に始まるとされる事と、論詩絶句の持つ戯態とに大きく関わるであろう。即ち、清朝における論詩絶句の流行は、清朝における杜甫詩の尊崇と流行と切り離しては考えられないのである。論詩絶句の「最盛期」（後掲周益忠『論詩絶句』）とされる宋代もまた一方において杜甫詩が尊崇され著しく流行した時期であった事も、その傍証の一つとしてあげ得るであろう。論詩絶句は文学批評の体裁を取るが、それは決して正面切つて体系立った文学論ではない。一種の斜に構えた趣味的な文学批評である。従つて作者は何を素材にして論じても良いし、どこで議論を打切つても構わない。この戯態をよそおつた趣味的な手軽さも、清朝人に論詩絶句の作例が多い理由の一端であろうと筆者は考える。「戯」であればとりあえず批判は免れるし、いつでも逃げ道はあるのである。論詩絶句の姉妹篇とも考えられる論芸絶句、論詞絶

郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絶句』（竹村）

句、論画絶句など、清朝詩人に於て、一種の趣味主義的、或いは玩物喪志的な絶句詩が流行している事実もここで想起しておいてよい。古今の蔵書家七三八名をすべて七言絶句詩で論評した清・葉昌熾『蔵書紀事詩』七巻などはその好例である。

但し、戯れであるが故に、従来論詩絶句は文学批評の正道とはみなされず、また景と情とを必須要素とする絶句詩において、景の描写を欠くが為に絶句詩研究からも無視され続けて来た。しかし文学史研究はあるがままの事実を伝えるものでなくてはならない。本書の刊行を契機として、今後の中国文学批評史研究において、この論詩絶句詩にも正当な研究の眼が向けられる事を筆者は切に望むものである。

三

以下には、本書を通読して得た幾つかの疑問、要望を呈して、本書評の締めくくりとしたい。

まず、論詩絶句の採録範囲をどこまでに限定するかの問題がある。銭氏前言では論詩絶句を次の四分類に分け、巻末に分類索引を附録する。

甲…詩学理論。乙…作者作品評論（歴代詩人統論、各時代各地方詩人評論を含む）。丙…詩歌選集評論。丁…詩話評論。

詩の表題に「論詩」等のキーワードを明示している場合は明確であるが、問題は、そうでない場合に、何を基準にしてその詩を論詩絶句と認定するか否かという事である。本書では、かなり広範囲にわたって論詩絶句と認定して採録している様に見受けられる。一例として王維「題輞川図」（第一冊四頁所収）をあげる。

宿世謬詞客 前生応画師

不能捨餘習 偶被時人知

この詩は、詩人であり画師でもあった王維の自己批評を述べた題画詩である。本書の分類索引では甲…詩学理論の部に編入（第四冊分類索引一頁）するが、この詩を論詩絶句として認めることは、蓋しできないであろう。その

理由は、題画詩の表題を有するこの詩はこの四句だけでは詩意が完結しておらず、この詩からは王維の文学理念が十分に窺い知れないからであり、それに何よりも、この詩はもともと絶句詩体ではないからである。即ち、宋・洪邁輯、明・趙宦光校『万首唐人絶句』巻二、五言詩にはこの詩をそのまま「題輞川図」として輯録する。本『万首論詩絶句』もこの『万首唐人絶句』に拠ったとおぼしい。しかし、王維の原作はこの通りではない。宋・蜀刻本『王摩詰文集』巻十によれば、該詩は「偶然作六首」其六の三―六句の絶句なのである。原詩は次の通り（清・趙殿成注『王右丞集箋注』巻五、『全唐詩』巻一二五も同じ）。

老来懶賦詩　唯冇老相隨　宿世謬詞客　前身応画師
不能捨餘習　偶被世人知　名字本皆是　此心還不知

こうして、王維の「題輞川図」は、その詩内容からも、その由来の経緯からも、論詩絶句中に編入することはできないであろう。この他の詩例においても、本書が何を基準にして論詩絶句に認定したか疑問を生じた詩例もままあった。論詩絶句の定義なり、論詩絶句と認定する基準なりを明示して欲しかったと思う。併せて要望を一つ述べれば、このような誤りや疑念を払拭する為にも、各論詩絶句の出拠を是非明示して欲しかった。これは今後の研究者の検索の為にも望まれる措置である。

四

最後に、銭氏前言に甘えて、本書に輯録されていない以下の諸詩例は果して論詩絶句の「遺珠」として認め得るや否や、将来の統補の為にも検討をお願いしたい。（例示中、周〇頁とあるのは周益忠氏『論詩絶句』《台北・金楓出版社・一九八七年》、羊〇頁とあるのは羊春秋氏等『歷代論詩絶句選』《湖南人民出版社・一九八一年》、また呉〇頁とあるのは呉世常氏『輯注論詩絶句二十種』《陕西人民出版社・一九八四年》の各著の頁数を示す。

1 宋・梅聖俞 廻陳郎中詩集（周六一頁）

2 宋・趙抃 題八詠樓（周六三頁）

郭紹虞・錢仲聯・王遽常編『万首論詩絶句』（竹村）

- 3 宋・王安石 韓子（周六四頁）
4 宋・晁說之 杜詩（周七〇頁・羊六九頁）
5 宋・饒節 答惇上人兩首（周七一頁）
6 宋・李彭 有懷雪堂旧遊（周七十二頁）
7 宋・陳与義 和張規臣水墨梅（周七六頁）
8 宋・王十朋 鑑湖（周七七頁）
9 宋・陸游 六芸示子聿（周八二頁）
10 宋・范成大 觀楔帖有感（周八五頁）
11 宋・姜夔 除夜自石湖歸苕溪（周八七頁）
12 宋・劉克莊 孟浩然騎驢圖（周八九頁）
13 宋・劉克莊 題放翁像（周九〇頁）
14 宋・劉克莊 題誠齋像（周九一頁）
15 宋・胡仲弓 次適安感古（羊一三二頁）
16 金・周昂 醉經齋為虛鄉麻長宦賦（周九四頁）
17 金・王寂 兒子以詩酒送文伯起、既而復繼一詩、予善其用韻頗工、為和五首（周九六頁）
18 元・劉因 宋理宗南樓風月橫披（周一〇四頁）
19 元・方回 後秋思五言（周一〇五頁）
20 元・張觀光 論詩（周一〇七頁）
21 元・張觀光 題梅花詩卷後（周一〇七頁）
22 元・張之翰 題趙樊川日本記行（周一〇八頁）
23 元・胡祇通 題遺山贈別濟川詩卷（周一〇九頁）

- 24元・曹伯啓 題建康路教湯碧山舍陵十詠卷後（周一〇九頁）
- 25元・葉顥 双溪懷休文遺跡絕句（周一一一頁）
- 26明・周砥 讀故友徐幼文詩集有懷（周一一二頁）
- 27明・楊基 夢故人高季迪二首並序（周一一三頁）
- 28明・陳白沙 隨筆（周一一六頁）
- 29明・陳白沙 對酒用九日韻（周一一七頁）
- 30明・薛蕙 戲成五絕（周一一八頁）
- 31明・王九思 漫興十首（周一二〇頁）
- 32清・張英 讀放翁詩偶成（周一四〇頁）
- 33清・龔自珍 舟中讀陶詩三首（周一六九頁・羊三七五頁・吳三三〇頁）
- 34清・鄧方 冬日閱國初諸家詩、因題絕句八首（吳三九五頁）
- （人民文学出版社、一九九一年二月、全四冊）